

教育心理学関係

博士論文要旨

(2002年10月～2003年9月)

ここに掲載する博士論文要旨は、1996年から自己申告によるものとなりました。

東北大学大学院教育学研究科

博士(教育学) 庭野賀津子

「音響分析による親-乳児間音声相互作用の発達の研究」

本研究の目的は前言語期における親子間の音声相互作用の発達の变化を音響分析によって詳細に検討し、明らかにすることであった。本論文は50組の健常母子を対象とした量的研究、および双生児や父母間を比較した事例研究から構成されている。結果より、親による対乳児音声の音響的特徴は乳児の月齢によって変化すること、父母間では音響的特徴は同様の傾向を示すが発話機能のカテゴリ一別発現率には有意な差のあること等が示された。

筑波大学心理学研究科

博士(心理学) 澤田 匡人

「児童・生徒における妬み感情とその対処方略」

本論文では、児童・生徒の妬み感情を取り上げ、その喚起から対処に至るまでの因果関係を調査研究によって検討した。その結果、対処方略は「破壊的-建設的」と「認知的-行動的」という二次元で解釈できた。また、年齢が上がるにつれて、他者の類似性や対象の獲得可能性などの状況要因が、妬み感情の喚起や対処方略の選択に影響を及ぼしていた。ここから、加齢に伴い、状況に応じて対処方略を選択できるようになることが示された。

筑波大学心理学研究科

博士(心理学) 飯田 順子

「中学生の学校生活スキルに関する研究」

本論文では、中学生の学校生活スキルに焦点を当てた効果的な援助方法の開発のため、①学校生活スキル尺度の開発、②学校生活スキルとその他心理学的変数の関連の検討、③スキルトレーニングの実践が行われた。その結果、学校生活スキルには、自己学習スキル、進路決定スキル、集団活動スキル、健康維持スキル、同輩とのコミュニケーションスキルがあること、各スキルが中学生の心理面に特定の役割・機能を持つこと、トレーニングによってターゲットスキルが向上したことが示された。

上智大学文学研究科

博士(心理学) 岡安 孝弘

「中学生の学校ストレスとメンタルヘルスに関する研究」

中学生の学校不適応の予防およびメンタルヘルスの向上を目的とし、①学校ストレスとストレス反応との関係、②ソーシャルサポートのストレス緩和効果、③いじめとメンタルヘルスの関係について、調査研究から得られた知見を示した。また、それらの基礎的研究成果に基づいて、学校で実践可能な心の健康診断、ソーシャルスキル教育、ストレスマネジメント教育、いじめ防止対策の具体的方法を提案した。

筑波大学大学院人間総合科学研究科

博士(心理学) 尾崎 康子

「幼児における筆記具操作の発達に関する研究」

30～69ヵ月の幼児289名が描画している際の筆記具操作をVTRで多面的に検討することにより、筆記具操作を筆記具持ち方、上肢の安定性、上肢運動の側面から調べ、幼児の筆記具操作の発達変化を系統的に明らかにした。さらに、筆記具操作の発達と高次諸機能との関係を検討した結果、筆記具操作の発達が子どもの象徴、認知、行動制御などの発達と連関して推移することが示された。これらの結果は、縦断的研究によっても確かめられた。

お茶の水女子大学人間文化研究科

博士(人文科学) 佐久間路子

「幼児期から青年期にかけての関係的自己の発達：他者との関係に応じた変化の自覚の成立」

本論文は、他者との関係における自己に焦点をあて、幼児期から青年期にかけての自己概念の発達と、関係に応じた自己の変化の自覚について検討を行った。その結果、①幼児でも関係の特質を反映するように自己が分化しており、発達に伴いより分化していくこと、②青年の大多数が自己の変化を自覚し、変化を肯定的に捉えていること、③特に大学生女子において変化に対する否定的意識が心理社会的適応へ影響することを明らかにした。